

日本における女性起業家のスキルに関する一検討

大野 邦夫[†] 西口 美津子^{††}

東日本大震災後の東北地方の復興に際して、地域社会における自律的な取り組みが重要である。特に生活者自ら問題を把握しその解決のための方策を企画・実践して地域の復興のために活動することが望まれる。その具体的な人材としては地域に密着した生活者としての女性起業家を育成することが期待される。しかしその育成法や教育法についての一般的な考え方が固まっているわけではない。ここでは手始めに歴史的な人物を取りあげる。明治維新後に中央政府と関わりつつ、自らの意思で教育事業と障害者の福祉事業を立ち上げた津田梅子と石井筆子を取りあげて彼女等のスキル学び取ることを試みる。津田梅子は津田塾大学を設立し、日本の女子高等教育事業に貢献した。他方石井筆子は障害者福祉施設の滝乃川学園を設立し、知的障害者の福祉施設を創設した。本報告ではマトリックス履歴書を用いて、女性起業家としての彼女たちのスキルを分析し、その共通の要因を検討すると共に、それらのスキルをエドガー・シャインのキャリア・アンカーにより位置づけて評価することを試みる。

A Study on the Skills for Japanese Woman Entrepreneurs

KUNIO OHNO[†] MITSUKO NISHIGUCHI^{††}

Autonomous regional planning should be required to restore the local communities in Tohoku district due to the big earthquake on March 11 in 2011. It will be strongly expected for the local community people to find and recognize the problems they have to face, and to make the practical solution for the problems by themselves to restore their community. To solve such community problems, human resource development will be important and the woman entrepreneurs will be very good human resource examples for local communities. However, there exists no general educational method to raise woman entrepreneurs. Then we started to learn existing historical woman entrepreneurs Umeko Tsuda and Fudeko Ishii. Umeko Tsuda is famous to establish Tsuda courage of liberal arts higher education work, while Fudeko Ishii organized Takinogawa Gakuen of handicapped people's institute work. Skills of both Umeko Tsuda and Fudeko Ishii have been analyzed through the matrix CVs and common skills have been selected. Based on the analysis, those skilled have been evaluated through the concept of Edgar Shein's career anchor.

1. はじめに

産業構造の変化、少子高齢化、省資源・省エネルギーなど日本社会の多様な問題を解決し得る人材の育成について検討しているが[1][2]、本報告ではその具体例として女性起業家の育成に関する検討を報告する。東日本大震災後の東北地方の復興に際して、地域社会における自律的な取り組みが重要である。特に現場において生活者が自ら問題を把握しその解決のための方策を企画・実践して地域の復興のために活動することが望まれる。その具体的な人材としては、生活現場に密着した女性の起業家を積極的に育成することが期待されるが、その教育法や教材などについて一般的な考え方が固まっているわけではない。ここではその手始めに、歴史的に活躍した人材を取りあげ、その活動を通じて明示されるスキルについて注目し検討する。

その具体的な事例として、明治維新後の中央政府と関わりつつ、自らの意思で教育事業と障害者の福祉事業を立ち上げた津田梅子と石井筆子を取りあげ、マトリックス履歴書[3]を用いて、彼女たちのスキルを分析する。

津田梅子と石井筆子のスキル獲得過程を、マトリックス履歴書により記述するが、その前にマトリックス履歴書について説明する。一般の履歴書や職歴書は、時系列的に記述されている。日本の場合は過去から現在に、欧米の場合は現在から過去にという相違はあるが、1次元の時系列情報である。マトリックス履歴書は、記述される履歴・職歴を上から下へ記述するのではなく、表形式として左上から右下へ記述する。その結果基本的な履歴は表の対角線上のブロック内に記述される。さらに継続する期間毎の業務内容の関連を図1のようにマトリックス的に展開して記述すると相互に関係する内容を把握したり新たに発見することが可能となる。

連続する期間AとBについて、一般の履歴書だと上から下に同じ列に連続して記述するところを、逐次右側の列にシフトして段違いに記述するのである。そうすると、期間Aの右側には空間が生じることになる。この空間に期間Aの項目に関連・対応する期間Bの関連用語を記入するのである。以上の手法で、期間毎に習得したスキルが、以後のキャリアにどのように生かされたかが明確化される。

マトリックス履歴書は、シニア人材のスキル記述の効率化のために考案したものであるが、既存の人物のスキルを分析するためにも有効である。このことを先にベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉のマトリックス履歴書を作成し彼らの共通のスキルを抽出する検討を通じて明らかにし

[†] 職業能力開発総合大学校
Polytechnic University

^{††} 福島工業高等専門学校
Fukushima National College of Technology

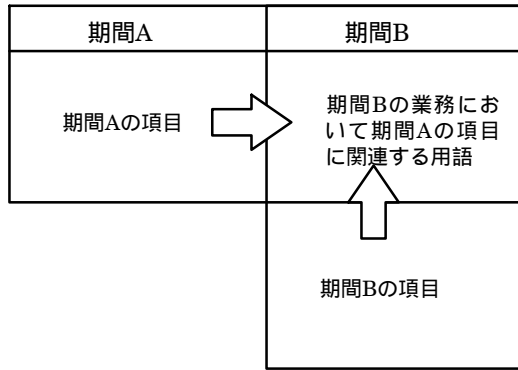


図1 マトリックス展開による関連項目記述

た[2]。同様の手法を津田梅子と石井筆子に適用し、彼女たちのスキルを分析することにより、近代日本の女性起業家が誕生し活躍した状況を把握したいと考える。

2. 津田梅子による教育事業

津田梅子[4][5]は、津田塾大学の創設者として有名であるが、明治維新後に欧米の文化を摂取するために幼くして米国に派遣された日本人女性の一人としても有名である。その彼女の生涯をマトリックス履歴書で分析し、教育事業の起業家としてのスキルの分析を試みる。図2に津田梅子のマトリックス履歴書を示す。ここでは彼女の生涯を以下の6つの時代に大別し、概要を解説する。

津田梅子のマトリックス履歴書

0~18	18~20	20~25	25~28	28~36	36~65
1864~1882 [誕生から米国滞在まで] 自由な雰囲気のある家庭に生まれる キリスト教の洗礼を受ける ロングフェローに可愛がられる ホイットニー家が津田家を訪問 理数系で優秀な成績 White-footed deerの詩を朗読朗誦	1882~1884 日本の風習への違和感 キリスト教と日本社会との矛盾	1884~1889 石井筆子の洗礼の代母 クララが留学手続きに協力	1889~1892 女子教育への支援者獲得 生物学を専攻 『The Ocean Voyage』制作	1892~1900 ヨーク大僧正との出会い 日本の女子教育を新聞投稿	1900~1929
	[帰国後の生活] 石井筆子と知り合う メソジスト教会での教職経験 キリスト教宣教師への批判 伊藤博文家の家庭教師 下田歌子と知り合う 鹿鳴館の舞踏会 鹿鳴館バザーに参加 横浜女塾で英語を教える	華族女学校の同僚 教職への具体的関心 日本の将来展望を把握 教職の具体化 有力者の知遇を得る 有力者夫人の知遇を得る 英語教育の専門家となる	専門家としての学位取得 女子教育への意志を固める Oswego師範学校で学ぶ	デンバー婦人大会に参加 女子教育への課題把握 英学塾設立資金の寄付	静修女学校の教地を得る 英学塾から宗教色を廃す 「伊藤公の思い出」執筆 運営協力者の確保
		[華族女学校に奉職] 石井筆子は同僚のフランス語教師 アリス・ペーコンに留学を進められる モリス夫人への依頼	アリス・ペーコンの執筆に協力 プリンモア大学との交友 [プリンモア大学への留学] 生物学を専攻 学位取得 8000ドルの教育基金を集める アナ・ハツホンと知り合う	デンバーに石井筆子と参加	英学塾の設立資金 英学塾の設立・運営に協力
				[再度華族女学校で教育] 明治女学院講師も勤める 高等女学校令 桜井彦一郎の協力 デンバー婦人大会に参加 ヨーク大僧正との出会い	実務担当者
					[女子英学塾創設] アリス・ペーコンの無報酬協力 新渡戸稲造、巖本善治の講義 大山捨松、上野栄三郎の支援 専門学校令 1929没

図2 津田梅子のマトリックス履歴

2.1 誕生から米国滞在を経て帰国するまで

梅子は幕臣津田仙の次女として幕末の1864年に江戸の牛込で生まれた。津田仙は幕臣であったため、明治維新後に職を失ったが、明治2年（1869年）に築地のホテル館へ勤めはじめ、津田家は一家で向島（現在の墨田区）へ移った。仙は欧米の科学技術や文化に関心を持ち、新規事業として西洋野菜の栽培なども手がけ、幼少時の梅子は手習いや踊などを学びつつ父の農園の手伝いもしている。

1871年、父の津田仙は明治政府の事業である北海道開拓使の嘱託となった。開拓使次官の黒田清隆は女子教育に関心を持っていた人物で、仙は黒田が企画した女子留学生に梅子を応募させ同年渡米した。派遣された5名の女子のうち梅子は最年少の満6歳であった。アメリカではジョージタウンでチャールズ・ランマン(Charles Lanman)夫妻の家に預けられた。派遣された5名の女子のうち、年長の2名

は体調を崩して帰国した。残った3名が梅子、山川捨松（のちの大山捨松）、永井繁子（のちの瓜生繁子）である。この3名は生涯親しくしており、梅子がのちに女子英学塾を設立する際に二人は援助し惜しまなかった。

梅子は子供が無かったランマン夫妻に実の子のように可愛がられ、英語、ピアノなどを習い、市内のコレジエト・インスティテュート（Collegiate Institute）へ通った。日本へ宛てる手紙も英文で書くようになり、やがてキリスト教への信仰も芽生え、1873年7月には自らの意思で特定の宗派に属さないフィラデルフィアの独立教会で洗礼を受けた。1878年にはコレジエト校を卒業し、私立の女学校であるアーチャー・インスティテュート（Archer Institute）へ進学した。ラテン語、フランス語などの語学や英文学のほか、自然科学や心理学、芸術などを学んだ。特に自然科学や理数系に関しては卓越した成績であった。また、ラン

マン夫妻に連れ添われて休暇には米国各地を旅行し、自由な米国文化に親しんでいる。1873年にマサチューセッツに旅行した際に詩人のロングフェローに会い、彼に可愛がられたという逸話がある。1881年には開拓使から帰国命令が出たが、在学中であった山川捨松と梅子は延長を申請し、1882年7月に卒業。同年11月に日本に帰国した。

2.2 帰国後の生活

梅子らは帰国したものの、旧弊の価値観が色濃く残る日本においては女子留學生の活躍できる職業分野に乏しく、父母が通うメソジスト教会で教育を手伝ったりしたが、将来の人生に悩んだようである。山川捨松と永井繁子はそれぞれ軍人へ嫁したが梅子はそのような人生には批判的であった。また、幼少からの長い留學生活で日本語能力は通訳が必要なほどになり、日本的風習にも不慣れであった。

1883年に、外務卿・井上馨の邸で開かれた夜会に招待され、伊藤博文と再会し、華族子女を対象にした教育を行う私塾・桃夭女塾を開設していた下田歌子を紹介される。このころ父・仙との確執もあったことから、梅子は伊藤への英語指導や通訳のため雇われて伊藤家に滞在し、歌子からは日本語を学び、「桃夭女塾」へ英語教師として通う。

憲法や議会制度について思案していた伊藤博文は梅子を通じて米国の具体的な市民生活、教育制度などを把握したと思われるが、梅子にとって博文から聞かされる欧米と日本との対比、日本の将来ビジョンなどは、彼女の人生観に大きな影響を与えたと考えられる。伊藤博文が安重根に暗殺された時に「伊藤公の思い出」(“Personal Recollections of Prince Ito”)という英文の弔辞を書いているが、博文の人格を賞賛し、彼女自身が彼に強く影響されたことを記している。

米国に派遣された女子留學生は、政府の欧化政策のキーパーソンであり、鹿鳴館の舞踏会やバザーにも参加させられた。この経験により、日本の有力者やその婦人の知遇を得ることができ、後の梅子の起業家としての活動に貢献したと考えられる。

2.3 華族女学校に奉職

1884年に伊藤に推薦され、学習院女学部から独立して設立された華族女学校で英語教師として教えることとなった。1886年(明治19年)には職制変更で囑託となる。

梅子は華族女学校で3年余り教えているが、上流階級の気風には馴染めなかったと言われ、この頃には何度か薦められていた縁談も断っている。やがて梅子は「二度と結婚の話はしないでください。話を聞くだけでもうんざりです」と手紙にしたためたほど、日本の結婚観に辟易して生涯未婚を誓う。

1888年には、留學時代の友人アリス・ベーコンが来日し、彼女に薦められて再度の留學を決意する。父の仙の知人で、日本の商業教育に携わっていたウィリアム・ホイットニーの娘、クララの仲介で留學希望を伝えて学費免除の承諾を得て、校長の西村茂樹から2年間の留學を許可される。

2.4 ブリンマーカレッジに留學

1889年7月に再び渡米。当時は進化論においてネオ・ラマルキズムが反響を呼んでおり、梅子はフィラデルフィア郊外のブリンマーカレッジ(Bryn Mawr College)で生物学を専攻した。その背景には、農園を経営した父の影響

があると思われる。3年間の課程を切り上げて終了させ、留學2年目には蛙の発生に関する論文を執筆した。使命であった教授法に関する研究は州立のオズウィゴ(Oswego)師範学校で行う。梅子に留學を勧めたアリス・ベーコンは日本習俗に関心を持ち、日本女性に関する研究をしていた。ベーコンがアメリカへ帰国し、研究を出版する際には彼女の著書の執筆の手助けをしている。彼女の研究を通じて梅子が日本の女性教育に本格的に関心を持つきっかけになったとも言われている。留學を一年延長すると共に、梅子は日本女性留學のための奨学金設立を発起し、公演や募金活動などを行い8000ドルの基金を集めた。

2.5 再度華族女学校で教育

大学からはアメリカに留まり学究を続けることを薦められるが、1892年8月に帰国した。再び華族女学校に勤めた。梅子は教師生活を続けるが、自宅で女學生を預かるなど積極的な援助を行い、1894年には明治女学院でも講師を務め、1898年5月に女子高等師範学校教授も兼任する。

その直後に文部大臣の要請で石井筆子と共にデンプーで開催される婦人倶楽部万国大会に日本代表として参加するために渡米し、その後単身で英国の教育制度を調査するために渡英した。英国では国教会のヨーク大僧正に会見する機会を得、その後の教育者としての真摯な価値観を得るに至った模様である。

相前後して成瀬仁蔵の女子大学創設運動や、1899年に高等女学校令、私立学校令がそれぞれ公布されて法整備が整い、女子教育への機運が高まると、1900年に官職を辞する。父の仙やアリス・ベーコン、大山、瓜生、桜井彦一郎らの協力者の助けを得て、同年7月に「女子英学塾」(現在の津田塾大学)の設立願を東京府知事に提出した。

2.6 女子英学塾創設

女子英学塾の設立認可を受けると東京麹町区に開校し、塾長となった。華族平民の別のない女子教育を志向して、一般女子の教育を始めた。それまでの行儀作法の延長の女子教育と違い、進歩的で自由なレベルの高い授業が評判となる(但し、当初は余りの厳しさから脱落者が相次いだという)。独自の教育方針を妨害されず貫き通すため、資金援助は極めて小規模にとどめられ、梅子やベーコンらの友人ははじめ無報酬で奉仕していたものの、学生や教師の増加、拡張のための土地・建物の購入費など経営は厳しかったと言われる。1903年(明治36年)には専門学校令が公布され、塾の基盤が整うと申請して塾を社団法人とする。

梅子は塾の創業期に健康を損ない、塾経営の基礎が整うと1919年(大正8年)1月に塾長を辞任する。鎌倉の別荘で長期の闘病後、1929年(昭和4年)に64歳で死去したが生涯独身を貫いた。津田英学塾の校舎は後に戦災で失われ、津田塾大学として正式に落成・開校したのは没後19年目の1948年(昭和23年)のことである。

3. 石井筆子による福祉事業

石井筆子[6]は、夫の亮一と共に日本で初めて知的障害者の福祉施設を開設した起業家であるがあまり知られてはいない。その背景には日本では障害者に関連する分野が、どちらかと言うと隠されてきたことに起因すると思われる。今後の高齢化社会を迎えるにあたり、高齢障害者の問題は極めて重要である。そのような面で石井筆子は明治維

新後の日本で最初に知的障害者の社会福祉をライフワークとして活躍した貴重な人材である。図3に彼女のマトリックス

履歴書を示す。ここでは彼女の活動を6期間に分けて要約する。

石井筆子のマトリックス履歴書

0~19	19~23	23~32	32~42	42~64	64~83
1861~1880 [誕生から東京女学校時代] 浦上4番願れ The Story of My Life執筆 ホイットニー英語塾 クララと知り合う グラント将軍に面会	1880~1884 キリスト教への関心 語学習得 クララの金曜奉仕活動	1884~1893 長女とキリスト教受洗 華族女学校囑託 梅子は洗礼の代母	1893~1903 夫の遺稿を出版	1903~1925 大日本婦人教育会雑誌に投稿	1925~1944
	[フランス留学] 語学習得 キリスト教理解 西欧の女子教育理解 クララの金曜奉仕活動 津田梅子と知り合う 鹿鳴館バザー	[結婚と出産] 小鹿島果と結婚 華族女学校囑託 知的障害児長女幸子誕生 長女とキリスト教受洗 大日本婦人教育会理事 女紅学校開設 夫死去	真明皇后のフランス語教師 孤女学院の資金募集に協力 華族女学校幼稚園主事 静修女学校校長	デンバーの大会に参加 梅子は英学塾を開校 養蚕事業を開始	梅子の帛紵を執筆 製菓事業に着手
			[教育事業を始める] 夫の遺稿「日本災異誌」を出版 孤女学院の資金募集に協力 真明皇后のフランス語教師 孤女学院を滝乃川学園に改称 大日本婦人教育会雑誌に投稿 デンバーの大会に参加	滝乃川学園に改称	
				[滝乃川学園の運営] 石井亮一と結婚 「白痴児その研究及教育」出版 養蚕事業を開始 火災により園児6名焼死 筆子怪我 財団法人化 浪沢亮一が理事長就任	
					[谷保移転後の学園運営] 関東大震災で谷保に移転 製菓事業に着手 津田梅子死去 浪沢亮一死去 日本精神薄弱者愛護協会設立 亮一永眠 筆子永眠

図3 石井筆子のマトリックス履歴書

3.1 誕生から東京女学校時代まで

肥前国大村玖島城下岩船（長崎県大村市）出身。肥前大村藩士で西郷隆盛と勝海舟の江戸城開城談判の立会人の功績で男爵となり、福岡県令等を務めた渡辺清・ゲンの長女。旧姓は渡辺。12歳の時に父のいる東京へ祖父母とともに上京。全て英語教育であった東京女学校を卒業した。その後もウィリアム・ホイットニーの英語塾に通い、娘のクララとも親しくなり、クララと共に社会奉仕活動に協力した。明治政府に雇われた医師、エルヴィン・フォン・ベルツが滞在中に執筆した「ベルツの日記」にも「幼少より、英語、フランス語、オランダ語に堪能な才媛」として紹介されている。

3.2 フランス留学

1880年に皇后の命により大村藩主の娘婿であった長岡護美のオランダ公使赴任の際の随員として女性としてただ一人選ばれる。イタリアに赴き、次いでフランスに留学した。欧州での生活を通じて、女子教育や教会活動、地域のセツルメント活動などを理解した。

3.3 結婚と出産

帰国後、1884年に幼少より婚約していた工部省鉱山局技師・農商務省官吏の小鹿島果と結婚したが、鹿鳴館の舞踏会に出かけたりして時代の空気を十分に味わっていたよう

である。1885年、華族女学校囑託としてフランス語の教鞭をとったが、同僚の英語教師に津田梅子がいた。1886年に長女の幸子が誕生。したが、産まれて半年が経っても首がすわらず発育が遅いことに疑問を抱き、病院で検査をした結果知的障害と診断された。当時の知的障がい者は、働く能力がない者として差別を受け、法令で義務教育の対象からも除外されていた。また世間の風当たりも強く、家柄を気にする時代であったため、病院や自宅の座敷牢に隔離されることもあったという。その後、次女の恵子は幼くして没し、1891年に生まれた三女の康子も虚弱児であった。

そのような折、クララ・ホイットニーを介して、フランス人の法学者ボアソナードに会う。ボアソナードは当時明治政府が不平等条約の改正を実現するために、欧米列強が前提条件としていた近代法典の整備のため、フランスの法律をモデルに各種国内法を定める顧問として招聘されていた。子供の障害に悩む筆子は、ボアソナードから「人権」という考えを教わり、それを新たな心の支えとして人生を考えるようになった。

3.4 教育事業を始める

華族女学校で教鞭を執りながら、1887年に付属幼稚園主事を兼任した。女子教育に精力を傾け、女子高等師範の木村貞子と協力して大日本婦人教育会を結成した。会員の

ための教養講談会の開催、雑誌の発行とともに女紅学校を開校した。また福祉活動を活発に行うと共にC・H・ローズ経営の静修女学校主宰も務めた。1892年に夫の果が結核のため死去した。夫との間に男子がかったため筆子は離縁され、実家の渡辺家に戻った。

立教大学教頭や顕暉女学校校長をしながら、聖三一孤女学院（後の滝乃川学園）の石井亮一を訪ねるが、素性や能力に関わりなく、生徒と同じ目の高さで接する亮一の姿に感動し、子供を預けることにした。1895年に孤女学院の特別資金募集の発起人となるが、その年に三女の康子が8歳で亡くなった。

1898年に文部大臣の要請で津田梅子と共にデンバーで開催される婦人倶楽部万国大会に日本代表として参加するために渡米した。帰国後、筆子と津田梅子は華族女学校教師を退職し、梅子は女子英学塾を創立、筆子は兼務していた華族女学校幼稚園主事と女紅学校主宰の全てを退職し、静修女学校校長に専念した。石井亮一も立教大学と顕暉女学校を辞任し、聖三一孤女学校を滝乃川学園と改称して学園長となり、知的障がい児童を積極的に受け入れた。これは日本初の知的障がい児教育の教育機関である。

3.5 滝乃川学園の運営

1902年静修女学校閉校に伴い校長を辞任し、女子高等教育を津田梅子に一任し、滝乃川学園に長女の幸子と住むこととした。1903年に周囲の反対を押し切って、亮一と再婚。亮一は37歳、筆子は43歳であった。亮一が米国から持ち帰った知的障がい教育の理論を苦戦苦闘しながら指導し実践した。知的障がい者が家庭で育てられた生活を改善させることにより、徐々に生活力を獲得することに驚かされたという。また併設された保母養成部で英語、歴史、習字、裁縫などの教育を実施した。1906年、近隣に軍事施設ができたため滝乃川学園は滝野川（北区）から西巢鴨村庚申塚（豊島区）に移転した。1916年に長女の幸子が三十歳で亡くなった。

1920年に男子児童の火遊びが原因で滝乃川学園が焼失する。この時、取り残されていた園児を救出するために筆子は負傷し以後身体障害者となる。この火事で園児六人が亡くなり、学園の運営記録等も全て燃えた。火事で学園の大半が焼失したことにより、施設の再建のメドが立たず、子供たちを教育する資金もないため、亮一は一端、学園の閉鎖を決めるが、学園閉鎖を聞きつけた東京女学校時代の同級生の穂積歌子（法律家の穂積陳重の妻）と、穂積の父で政財界に影響力を持つ洪沢栄一が援助を申し出た。

さらに華族女学校時代の教え子である皇后陛下（後の貞明皇太后）が学園の存続を希望し、金一封のご下賜があり、更に、筆子の同級生、元同僚、教え子、各種政財界人たちによる見舞いや寄付金が総額10万円（現在の価値で4000万円）集まった。これにより、財団法人として許可された学園を再建し、1921年に初代理事長として洪沢栄一を迎え、改めてスタートを切った。筆子はこの頃より「もしほぐさ」、「鐘のひびき」、「自然界とおとぎばなし」など数篇の童話集を出版している。

3.6 谷保移転後の学園運営

1928年の関東大震災後、学園周囲の環境が悪化したため、より閑静で農業技術を身につけるための敷地を確保できる北多摩郡谷保村（東京都国立市）に移転した。将来の自立に役立つ狙いもあったが、これにより莫大な借金

を背負うこととなる。移転費用は東京府の長期低利融資で調達し、巢鴨の旧学園敷地を売り借金返済にあてる目論見であったが、1929年に金融大恐慌により負債は当初の倍に膨らんだ。学園運営経費の捻出に奔走するかたわら、付設の保母養成部の教師として活動をしていたが、1932年に過労から脳溢血で倒れる。回復し現場復帰を果たしたが、1937年に二人三脚で学園経営をしていた夫の亮一が病のため没した。

亮一が没した同年は、盧溝橋事件より日中戦争が勃発し、学園生や職員に召集令状が届くなど、学園経営の資金繰りが益々厳しい状況に陥っていたこともあり、後任の学園長も決められず、一端は学園を閉鎖することも考えたが、筆子自身が2代目学園長に就任し、滝乃川学園の存続を決めた。この時、すでに半身不随の身であったという。太平洋戦争の最中の1944年に逝去。享年78歳。その後、滝乃川学園の3代目学園長に筆子の弟の渡辺汀が就任し、戦争を乗り越え、現在は社会福祉法人・滝乃川学園として運営されている。

4. 女性起業家としてのスキル

4.1 儒教文化の伝統

女性起業家としてのスキルを検討する以前に日本社会における女性の仕事・労働についての歴史的な背景を知っておく必要があるだろう。日本で女性が男性と平等に仕事をするのが制度的に可能になったのは戦後日本国憲法が施行されて以降のことである。それでも女性の社会進出が遅れていることはマスメディアが頻繁に報じておりである。

戦前の日本では、「良妻賢母」というキーワードで象徴されるように女性は家庭を守ることが使命とされていた。その背景には江戸時代以前の儒教の思想が根付いている。女性起業家という人材育成の背後にはそのような日本の伝統文化が控えている。

そのような伝統文化を背景にして、戦後の高度成長を支えた価値観に日本的経営という思想が存在する。日本的経営は、年功序列、終身雇用、企業内組合という雇用制度がコンテキストとして存在するが、さらにそれを支える背景には、企業戦士としての男性を家庭で支える良妻賢母という儒教的な思想が内在していたと言えるであろう。従って日本国憲法の下では、男女の役割の平等が謳われているのであるが、実態は戦前の儒教的価値観が背後に見え隠れしている。

戦前の儒教的価値観は、忠君愛国、滅私奉公、祖先崇拝、家父長制、男尊女卑、親孝行といったキーワードで象徴されるが、明治憲法の下では教育勅語がその具体的な行動モデルを提供して国民の生活を束縛していた。その思想は、官僚主導の明治政府では極めて効率的なものであったと言える。このことをバートランドラッセルは教育論[7]の中で象徴的に取りあげている。日本の女性起業家は、そのような背景と経緯を知る必要があるだろう。そのような観点で、明治時代に困難な状況で事業を立ち上げた2人の女性起業家について取りあげたのである。

4.2 キリスト教信仰

この2人に共通するスキルを論じるにあたり、キリスト教の影響を考慮する必要がある。津田梅子は米国滞在中に

自らの意思で洗礼を受けているが、これは彼女の強い意志に基づいている。当時日本ではまだキリスト教は公認されてはならず、ランマン夫妻は勤めるようなことはしなかった模様である。ただ彼女らを送り出した黒田清隆、伊藤博文、森有礼ら政府関係者は幼い梅子の意志を敢えて尊重したようである。

彼女は好奇心が強く、米国の小学校の友人との交流を通じてキリスト教の価値観を学び、クリスチャンになる道を選択したのであろう。その間に彼女の父、津田仙も日本でキリスト教の洗礼を受けている。その後日本に帰国して後は、欧米からのキリスト教ミッションには必ずしも好感を持たなかったようである。そのような経緯があって、津田塾をキリスト教のミッションスクールにしなかった点に彼女の日本人クリスチャンとしての自立した精神を感じる。

キリスト教信仰と起業家精神との関係については、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの精神と資本主義の精神」[8]に述べられているとおりである。梅子が自分の天職として女子教育を決意し、その後はジャイロスコープのようにまっしぐらにその道を進んだことがマトリックス履歴書から見て取れる。

石井筆子の場合も、キリスト教信仰が彼女の知的障害者の福祉事業に大きく関わっている。彼女の場合、フランス留学によりキリスト教に接し、その内容を把握したと思われるが、洗礼を受けるに至ったのは、誕生した長女が知的障害者であったことが強く影響していると思われる。その後誕生した子供も病弱であったり知的障害があったりして健康な子供は授けられなかった。その後、夫とも死別し、子供が後を継げなかったことにより、夫の実家からは離縁され、障害を持った子供をかかえて途方に暮れざるを得なかったが、そのような彼女を支えたのが仕事とキリスト教であったという。障害者の子供を預けて仕事をせざるを得なかったのであるが、志を同じくする石井亮一に出会い彼と一緒に知的障害者福祉事業を始めることができた。

以上から、津田梅子、石井筆子ともにキリスト教信仰を通じて社会に貢献する事業を設立し、それらは種々の困難な経緯を乗り越えて引き継がれ、今日まで継続する事業となっていることに注目したい。この二つの事業がキリスト教を背景として設立され継続しているのは、マックス・ウェーバー的な企業発展の倫理と共に、明治の文明開化時代にキリスト教を通じた欧化政策に起因する当時の女性に特有な進取の気概が感じられる。

4.3 社会変革者の観点

先のデジタルドキュメント研究会報告で[9]、社会変革者として取りあげたベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉の共通のスキルとして、基礎的な学力、独立精神、科学的思考、経済的知識、語学力、執筆力、情報発信力を取りあげた。津田梅子、石井筆子の場合も、従来の日本社会に存在しなかった組織制度を形成したということから、見方によっては社会変革者であり、上記のスキルを認めることが可能である。

4.3.1 基礎的な学力

津田梅子は幕臣の娘として、石井筆子は肥前大村藩士の娘として、共に幕末の社会変動期に先見性を持つ親に育てられ、先進の欧米社会に対する好奇心を抱いて砂に水がしみこむように知識を吸収していったと考えられる。そのような知識獲得を通じて両者は基礎的な学力を培ったと思わ

れる。梅子の場合、米国に滞在したことによりさらに強烈な経験を重ね、基礎的な学力を伸ばしたと言える。

4.3.2 独立精神

共に儒教道徳に基づく女性の地位には不満であったにちがいない。津田梅子はそのような女性の地位を向上させることをライフワークとしたが、石井筆子は因習的な親が決めた結婚をして家庭の人となった。しかし授かった子供が知的障害者であったことに起因してキリスト教の洗礼を受け、夫の死別により離縁された後は自分で自分の人生を切り開くようになった。そのような観点からすると、梅子・筆子ともに独立精神に富んでいたと言えるであろう。

4.3.3 科学的思考

梅子の場合アーチャー・インスティテュートにおける自然科学系の成績は優秀であり、プリンモア大学での専門は生物学であり、研究テーマが蛙の産卵であったことからして、理系のセンスを持った科学的な資質を持っていたことは明らかである。筆子の場合はその経歴からは科学的な仕事や事業とは必ずしも関係してはいないと思われる。とは言え滝乃川学園の事業として、養蚕や製薬を企画していることを考えると、潜在的には科学的・合理的な精神の持ち主であったことが推察される。

4.3.4 経済的知識

事業家になるためには経済的知識は当然必要である。梅子の場合、その知識は教会でのバザーなどにより培われたと思われる。プリンモア大学での8000ドルもの教育基金の獲得などは、米国におけるキリスト教の献金文化を知らなければ到底不可能であろう。

筆子の場合も、フランス留学の際にキリスト教の教会活動や地域のセツルメント活動などの関係者の献金を通じたボランティア活動に触れ、困窮している人の援助のための資金の集め方や使い方についての思想を得ていたと思われる。そのような背景知識があったので、自分の子供が障害者であることを知った時に、その問題を自分で解決する方策を考え、そのための経済的な手段についても考えることができたと思われる。

4.3.5 語学力

梅子、筆子ともに英語の語学力は抜群である。梅子は英語の実力を買われて伊藤博文の家庭教師を勤め、華族女学校の教師になり、さらに自ら英学塾を起こしたのだから語学力無しに彼女の起業はあり得なかったと言える。

筆子の場合ティーンエイジャーの頃にクララ・ホイットニーと知り合い、彼女やその家庭で英語を学んだことがグラント將軍との対話やフランス留学につながり、その後の彼女の活躍を可能にした。特にフランス語に関しては、貞明皇后の個人教師となったことから分かります。卓越した能力であったことは明らかである。

4.3.6 執筆力

執筆力に関しては、これまで述べてきたスキルに比べると梅子、筆子ともにそれほど顕著とは言えない。特に目立った著書は存在しないのであるが、実際には二人とも優れた執筆力を持っていた。梅子の場合日本語よりも英語の方が得意であったので、彼女の文書の多くは英文で残されている。それらには新聞や雑誌への寄稿、講演原稿など

が挙げられる。例えば、1895年に米国のインディペンデント誌 (The Independent) に「日本婦人と戦争」(“The Japanese Women and the War”) というエッセイを寄稿し、それは米国の女性運動家に広く読まれている。さらに米国で7歳から18歳までの彼女を母親代わりに育ててくれたランマン夫人への日記のような書簡は、彼女が見聞したさまざまな出来事とそれへの想いが自由に綴られており、その執筆力は彼女の聡明さを物語るものである。

筆子の場合には東京女学校時代に「The Story of My Life」というエッセイを書いており、少女時代に英語で自分の生活を綴った経緯がある。その後、夫の遺稿を編集して出版したり、大日本婦人教育会雑誌に投稿したりしているので、執筆力は持っていたと言えるが、まとまった書籍として出版する機会がなかったと言えるであろう。

4.3.7 情報発信力

情報発信力は、個人的な能力というよりは、仲間や組織、関連人脈を含めた社会への情報発信力である。梅子の場合には、内外の恩人、友人、知人による豊富な人脈が非常に有効であった。国内においては父親の津田仙は農業教育分野の有名人であった。さらに伊藤博文は思想的にも実践的にも梅子にとって重要な人物であった。さらに華族女学校を通じた関係者である下田歌子、石井筆子と面識を持っていたこともその後の女子教育事業の準備活動のための強力な支援になったと言えるであろう。

米国で世話になったランマン夫妻、プリンモア大学への留学で世話になったアリス・ベーコン、プリンモア大学で知り合いその後の彼女の活動を支援してくれたアナ・ハツホンのような、米国人の友人を持っていたことも彼女の情報発信力を高めてくれたと言える。

筆子の場合には、石井亮一と出会い、彼の協力のもとで知的障害者の福祉・支援事業に取り組むことができたので、このパートナーと連帯しての情報発信であった。さらに貞明皇后や渋沢栄一のような卓越した有名人の情報発信の支援により、滝乃川学園の事業は遂行できたと言えるであろう。

4.4 キャリアアンカーによる分析

キャリア・アンカーは、MITスローンスクールのエドガー・シャインによって提案された概念で、個人が自分の職業を選択する際に、その背景となるモチベーションを分類したものである[10]。これは表1に示すように、8つカテゴリーに大別され、一般の人はそのいずれかに当てはまることが知られている。

キャリアを決定するにあたって、何かを犠牲にせねばならない場合に、どうしても諦めることができないような能力・動機・価値観であると言われる。

表1における奇数番号のTF, AU, EU, CHが挑戦的・改革的な価値観であるのに対して、偶数番号のGM, SE, SV, LSは管理的・保守的な価値観である。先に述べた社会変革者のスキルの多くは、奇数番号の挑戦的・改革的な価値観に対応する。すなわち、基礎的な学力(TF)、独立精神(AU, EC)、科学的思考(TF, CH)、経済的知識(TF, GM, AU, SV)、語学力(TF)、執筆力(TF)、情報発信力(TF)となるように思う。社会を変革することを志すのであるから挑戦的・改革的で当然であろう。

表1 キャリア・アンカーの8つのカテゴリー

No	名称	概要
1	TF: 専門的・職能別能力 (Technical/Functional)	専門領域について挑戦しつづけることに生きがいを感じる。
2	GM: 経営管理能力 (General Managerial)	組織の中で高い地位につき、経営管理能力を発揮する。
3	AU: 自立・独立 (Autonomy/Independence)	自営業や自由業等、自立性の高い職務を選ぶ。
4	SE: 保障・安定 (Security/Stability)	雇用の安定や職務の勤続等、常に安定を志向する。
5	EC: 起業家的創造性 (Entrepreneurial Creativity)	失敗にもめげずに組織や企業を創造する。
6	SV: 奉仕・社会貢献 (Service/Dedication)	世の中を良くすること、環境問題等に価値を見出す。
7	CH: 純粋挑戦 (Pure Challenge)	困難を乗り越え挑戦したい。
8	LS: 生活様式 (Lifestyle)	家族にも配慮し統合的にキャリアを構築して行く。

他方、社会変革者と言えども歳を重ねると保守的にならざるを得ない。従って徐々に管理的・保守的な価値観に移行していくのが自然である。そのような観点で梅子と筆子について分析を試みる。

4.5 津田梅子のキャリアアンカー

日本帰国後に彼女は自分の英語のスキルを国のために生かそうと考えたようである。そうであれば、専門的職業能力ということからキャリアアンカーはTFであろう。その後華族女学校で教職に就きTFとしてのアンカーは適えられたが、さらに日本の女子教育に貢献するために、再度留学し設立資金を集め津英学塾を創立した。この段階は、CHとECが対応する。その後具体的に経営を通じて社会に貢献したので、GMとSVが対応すると言えるであろう。従って、キャリアアンカーの推移のパターンとしては、「TF CH・EC GM・SV」と考えることが可能であろう。

4.6 石井筆子のキャリアアンカー

東京女学校の優等生であり、グラント将軍と英語で会話し、その後フランスに留学した筆子は優れた語学力を持つ専門家であり梅子と同様華族女学校で教職に就いた状況からはキャリアアンカーは梅子と同様にTFと思われる。その後筆子は結婚し家庭に入ったのでSEやLSかと推察されるが、日本の儒教的な旧弊によるものと考えられるとそれは妥当なキャリアアンカーとは言えないであろう。

生まれた子供が知的障害者であり、夫と死別し離縁された彼女は、知的障害者のための施設を設立することを志した。この段階のアンカーは、AUかCHであろう。やがて石井亮一と出会い彼と協力して滝乃川学園を設立するが、その段階ではAUからECと想定される。学園の運営に携わってからは、GMとSVが対応すると考えられるが、種々のトラブルがあり、GMではなくCHとECの繰り返しであったと思われる。従って、キャリアアンカーの推移のパターン

としては、「TF CH・AU AU・EC GM・SV CH・EC」と考えられる。

5. まとめ及び考察

以上、1章でこの検討の背景と分析手段として使用したマトリックス履歴書の概要を説明し、2章で津田梅子の、3章で石井筆子のマトリックス履歴書を考案し、4章で両者の比較の下に共通するスキルを分析した。共通するスキルの分析に際しては、ベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉の比較に基づく社会変革者としての要件とシャインのキャリアアンカーの視点の両者から検討した。

社会変革者として期待されるスキルは、(1)基礎的な学力、(2)独立精神、(3)科学的思考、(4)経済的知識、(5)語学力、(6)執筆力、(7)情報発信力が挙げられるが、津田梅子、石井筆子の場合も上記のスキルはかなり共通して保持している。これは、両者が社会変革者としても当時の日本社会に貢献していることを物語るものであろう。特に被災地の復興に資する起業家を育成する状況を想定すると、社会変革者としてのスキルは大いに期待したいところである。

キャリアアンカーとしては、梅子の場合は、「TF CH・EC GM・SV」という推移が、筆子の場合は、「TF CH・AU AU・EC GM・SV CH・EC」という推移が見られる。両者は類似のパターンとして考えることが可能である。すなわち、基本的には下記のような段階をたどると推察される。

- (1) 当初は専門的能力を培う (TF)
- (2) 専門的能力に基づき自分の天職やライフワークとしての目標を決め挑戦する (CH)
- (3) 挑戦した目標を実践を通じて具体化し起業的な取り組みとして企画・行動する (EC)
- (4) 具体的に事業を起こし運営が軌道に乗った後は安定した経営を心掛ける (GM)
- (5) 好調な運営が続けば、利潤追求だけではなく、社会的な貢献を目指す (SV)

梅子の場合、上記の(2)(3)、(4)(5)が統合されているが、上記のプロセスに則っている。筆子の場合(2)、(3)においてAUが挿入されているが、これは彼女が日本的な家父長的な慣習から自立するプロセスを含んでいるためである。(4)(5)については梅子の場合と同様に統合されている。その後さらにCH・ECのプロセスが追加されているが、これは既存の事業だけでは継続が困難で、養蚕や製菓の新規事業を志したためである。

6. 今後の課題

本研究は、ジョブカードのXML化に端を発するものであり[11][12]、その背景には米国のHR-XMLや欧州のEuropass-CVによる履歴書のXML化を通じて個人情報を拡張可能に構造化してライフログやスケジュール管理といったデータを体系的に管理することを意図するものであった[13]。また個人情報としての電子カルテをADL(アーキタイプ定義言語)を用いてオントロジ記述する手法が実用的に使用されていることから[14]、OWL-DLを用いて電子カルテと履歴書を統合的に管理する枠組みも研

究されて良いと考えられる[15]。従って、マトリックス履歴書をXML記述可能とし、専門知識、業界分類、職種分類、スキル表現などのカテゴリを活用して、関連分野におけるスキルの推論機能、シャインのキャリアアンカーの推論などが可能性として考えられる。同時に今回の検討のような歴史的な人物の評価にも、上記のオントロジ的な枠組みの活用が考えられるであろう。

7. おわりに

以上、津田梅子と石井筆子を例に日本における女性起業家のスキルについて検討した。被災地において地域コミュニティを活性化させる女性起業家の育成について考えるにあたり、過去の日本社会でそのような困難な状況で事業を起こした人材の例を考え、以上の2人を取りあげたのであるが一つの出発点に過ぎない。今後は、身近なより具体的な人材の例を調査し、梅子、筆子の場合のスキルやキャリアアンカーの推移などについて比較検討を行い、女性起業家への具体的な要求条件を明らかにすると共に、そのような人材を育成するための教育や訓練などについて検討したいと考えている。同時にオントロジを活用するマトリックス履歴書の作成手法についても研究したいと考える。

文献

- [1] Kunio Ohno, Mitsuko Nishiguchi; "A Study on Human Resource Development for Ecomaterial Recycling Society" Proc. on 11th International Conference on Ecomaterial (ICEM11), P-27, (2013.11)
- [2] 大野邦夫, 西口美津子; "循環型社会に向けた人材育成とICT技術の活用に関する検討", 情報処理学会研究報告, DD90-3 (2013.7)
- [3] 大野邦夫, 西口美津子; "マトリックス方式による履歴書情報の評価とキャリア設計の検討", 情報処理学会研究報告, DD89-7 (2013.3)
- [4] 山崎孝子; "津田梅子", 吉川引文館 (1962)
- [5] 大庭みな子; "津田梅子", 朝日新聞社 (1990)
- [6] 一番ヶ瀬康子ほか; "無名の人石井筆子", ドメス社 (2004)
- [7] パートランド・ラッセル(安藤訳); "教育論", 岩波文庫, pp50-52 (1990)
- [8] マックス・ヴェーバー(大塚久雄訳); "プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神", 岩波文庫 (1989)
- [9] 大野邦夫, 西口美津子; "地域コミュニティの再生に貢献する人材育成に関する検討", 情報処理学会研究報告, DD91-2 (2013.9)
- [10] エドガー・シャイン; "セルフ・アセスメント", 白桃書房, pp.5-13, (2009)
- [11] 大野邦夫, 須藤僚; "拡張可能な履歴書管理システムの情報環境に関する研究", 職業能力開発総合大学校紀要 (2010)
- [12] 大野邦夫, 角山正樹; "拡張可能な履歴書管理システムの実装に関する検討", 職業能力開発総合大学校紀要 (2011)
- [13] 大野邦夫; "個人の情報環境へのオントロジ適用の検討", 情報処理学会研究報告, DD88-1 (2013.1)
- [14] Thomas Beale, Sam Heard; "An Ontology-based Model of Clinical Information", MEDINFO2007, K.Kuhn et al.(Eds), IOS Press, 2007
- [15] 大野邦夫; "オントロジ技術の応用に関する一考察", 情報処理学会研究報告, DD41-1 (2003.9)